

<書評>

まるで美術書，一級の形態学図譜

「末梢神経病理 どう作り，どう読み，どう臨床に生かすか」

神田 隆，佐藤 亮太●著

評者 井上 聖啓(福島医大会津医療センター特任教授)

2022 年，神田隆編集『末梢神経障害——解剖生理から診断，治療，リハビリテーションまで』が医学書院から上梓されました。末梢神経疾患を語る上でその組織学的，病理学的知見は論をまたず極めて大切です。それ故に，前著『末梢神経障害』の中でも 15 ページを割いてそのエッセンスが記載されていました。今回，この部分が 180 ページに拡大され 1 冊の本となりました。題して『末梢神経病理——どう作り，どう読み，どう臨床に生かすか』，著者の膨大な経験と知見に基づいた教科書が生まれました。

「神経生検とはどういうものか」から始まり，標本作成の「手技」，さらに標本作成上の「アーチファクト」，その「正常像」，時に生検時に皮膚，筋まで採取する指南まで含めて，著者自身の生検に対する“考え方と姿勢”がにじみ出る記載に引き込まれます。

標本の顕微鏡写真はハガキ大で，色彩も自然で焦点もよく合って，これが見開きに 4 枚並び，その全てが何かを訴えかける写真で，まるで美術書のようでもあります。形態学の図譜としては一級です。

読者にはまず，総論の約 70 ページを熟読されることをお勧めします。病理形態学は，時に「絵解き」のような一面があります。本書の写真一つひとつを頭にたたきこむ。目を閉じても写真が浮かぶように何回も時間をかけてよく見る。この姿勢は顕微鏡を見るときにも，さらに患者を診るときにも当てはまることですが，それくらい本書に使われた写真は 1 枚 1 枚が見る者を魅了し，自然と脳裏に焼き付くものばかりです。教育的であり，応用が効き，頭

にたたき込んでおくに値するものばかりなのです。

各論では，日常臨床の場で，そうめったには遭遇しない症例も多く取り上げられています。このような疾患を丸暗記して覚えておくことは，味気なく，つらいものですが，神経生検標本の特徴を画像的，視覚的に覚えておけば，より身近なものに感じられるかもしれません。教科書を読んだだけでは疾患概念は単なる知識でしかありません。さまざまな症例を実体験して初めて疾患の本質が記憶されるものです。ですから，この図譜を「見る」という視覚体験を通して記憶してしまえば，しめたものでしょう。これらの写真はどれも美しく，その特徴をとらえきっているからです。

この本は図書館などで時々見る本ではありません。座右に置いて，時間のあるときに，どの頁でもよいから写真を眺めて，頭に刻み込むことを目的とした書物なのです。

神田隆，佐藤亮太両先生は，多くの神経疾患を，神経生検を通して身近なものとしてとらえてこられたことと思います。いまその蓄積をこの書籍の中で，私たちの前に公開していただいたことに敬服するとともに感謝する次第です。大いに活用させていただきたいものです。

●「末梢神経病理 どう作り，どう読み，どう臨床に生かすか」

B5・頁 200 2024 年 05 月

定価：11,000 円(本体 10,000 円+税 10%)

[ISBN978-4-260-05620-5] 医学書院刊